

歎異のひびき

曾 我 量 深

一

私は今年、東京へ二回行きました、六月の始めと十月の終りに行きました。その日程の中に——東京に「歎異抄の会」というのがありまして、東京に行きます度ごとに「歎異抄の会」が開かれます。六月に行きました時には、『歎異抄』の第十三条についての話でした。

『歎異抄』十九条ある中の第十三条と申しますと——『歎異抄』には十一條から十八條まで、八ヶ條の異義というものがあります。これは、親鸞聖人が入滅なされてから、直門の方々が段々／＼後を追ってこの世を去られますが、そういうところにおこる問題であります。『歎異抄』の著者は、色々の研究によってその中に名前の出ている唯円房というお方である、ということになっている。この唯円房は、親鸞聖人のお弟子の中では晩年のお弟子であって、最もお年の若いお方であります。親鸞聖人の長男善鸞は、その異義を、あさましい異義を唱えた。これは、恐らくは善鸞というお方が野心を持っておられたからであろうと思われます。この野心に駆られて異義を唱えられたわけでありましょう。そういうわけで、父親鸞聖人から義絶の宣告を受けられます。聖人のお孫様であって、善鸞様の長男であるお方は、如信上人というお方であります。このお方は、別に本願寺の住職をなされたという訳ではないのでありますけれども、本願

寺を建てられたと伝えられておるところの覚如上人は、如信上人を崇めて本願寺の二代目の住職であるとしてゐる。そして自分はそれを受け継いで三代目の住職となったのであると、こういうように、本願寺の世代は親鸞聖人を第一世、如信上人を第二世と決められた訳であります。実は、如信上人は本願寺の住職をしておられないのであります。それで、いま『歎異抄』の著者と伝えられている唯円房という方は、如信上人と年令も大変近いのであり、そして如信上人と非常に親しく交わっておられたものと思われるのであります。そういうようなことがあって、覚如上人は唯円房をお訪ねになって、色々お尋ねになったことが伝えられておるのであります。

大体、『歎異抄』は著者不明でありますけれども、不明だけでは済ましておれぬものでありますからして、色々と言から調べられているのであります。一番始めには、これは覚如上人の作であると、そういうように考えられた。西本願寺の編集になっておりますところの『真宗法要』では、覚如上人の作だと、そういう風に扱われている訳であります。本当は、著者が不明でありますけれども、そういうように一応決めておいたのであります。

この著者につきましては、私も大谷派の学者であり講者でありますところの香月院深励というお方が『歎異抄』を講釈されて——その講義は印刷されて残っておりますが——『歎異抄』の著者を色々調べ研究されて、如信上人の制作であるとしている。教証理証ということを色々研究されて、そういうように一応決定されたと思うのであります。そうでないとしますと、本願寺の二代目の住職という位置になっていらっしゃる如信上人には他に著書がないのですから、『歎異抄』が如信上人の著書であるとするとすれば、謂わば都合のよいことであつたのでしょう。

『歎異抄』について、蓮如上人が御覧になった書物が今日一番古いものでありますが、その『歎異抄』

に蓮如上人の奥書がついている。

「右斯聖教者、為_レ当流大事聖教也。於_レ無宿善機、無_レ左右_二不可_レ許_一之者也。」
こういう奥書がついている。

一一

今年の六月の始めに東京にまいりました時に、『歎異抄』の話をしてくれと、その時の注文は『歎異抄』第十三条、異義八ヶ条の中の第三ヶ条であります。それはどういう異義であるかと云いますと、

「弥陀の本願不思議におはせばとて悪をおそれざるは、また本願ぼこりとて往生かなふべからずといふこと」

そういう異義であります。そういう主張が根強く行なわれておったのであります。これは、つまり「本願ぼこり」という異義である。本願ぼこりというのは異義であり、邪義であるということである。今日、『歎異抄』を読んでおられる中で、多くの知識階級の方には、この第十三条について色々の批難があるようです。

それでは一体、第十三条というものはどういうものであろうか。それはつまり「本願ぼこり」、本願ぼこりの異義である。本願ぼこりと申しますのは、「悪を恐るべからず」「悪を恐れない、弥陀の本願は不可思議であるが故に悪を恐れない、そういう主張でありましょう。これは本願ぼこりというものであって、正しい考え方ではない。これは異義でなくて邪義である。このように批難はあったのであります。それに対して第十三条は、これは異義でもなんでもない、これは正しいと。悪を恐るべからずというのは正しいことである。それは、皆さん御承知の通り、『歎異抄』御物語第一条を読んで見ますと、一番始めのところに

「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」

とあります。

これは、まあ大体、『大無量寿經』下巻の始めに述べられてありますところの本願成就の文の御心を、簡単に示されたものであります。 「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて」と云われる弥陀の誓願不思議というのは、その誓願不思議によって「聞其名号信心歡喜乃至一念」ということが成り立つのであるから、これを如來の誓願不思議と云うのである。この誓願不思議ということが成就の文の上のどこにあるかと云いますと、「至心廻向」ということが誓願不思議ということでありましょう。そして「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつ」、これはつまり「信心歡喜乃至一念」でありましょう。「信心歡喜乃至一念」というのは、つまり「至心信樂欲生」と——至心信樂欲生というのは、いわゆる信の一念でありましょう。信の一念でありますけれども、しかしその内容から申しますというと、「前念命終、後念即生」という意義を持つておる。だからして体からいえば「一念」でありましょうけれども、内容から、内容の義というものから見ますというと、「前念・後念」という意義を持つものである。

善導大師の『往生礼讃』に「前念命終、後念即生」の御言葉があるのであります。『教行信証』「信巻」には、「前念命終、後念即生」の御言葉の一つ前に『般舟讃』の御文を引いてあります。いわゆる

「厭へば則ち娑婆永く隔て、忻へば則ち浄土に常に居す」

という御言葉が引いてあります。これはつまり、眞実信心の意義を「厭う」とか「忻う」ということで表わしたのであります。自力では、そういうことはなかなかできない。善導大師は「道俗時衆等、各の

無上心を発せども、生死甚だ厭ひ難く、仏法復忻ひ難し」といって、厭うことも忻うことも、ともに不可能であるという。自力の信心というものは、如何にしても成就し難きものである。それで「共に金剛の志を発して、横に四流を超越せよ」と、こう教えられているのであります。「共に金剛の志を発す」、金剛の志というのは即ち横超の大菩提心である。「各の発す」というのは自力が発すということである。自力はいつも発すのでありましょう。然るに横超の金剛心、横超の菩提心は、如来より賜われる信心でありますからして、すべてこの信心はみな同一である。同一であるからして共に手を取って、そして往生する。それは同時に往生する。同時に往生するということは、まあ、出来ないわけでありますけれども、しかし、信心の行者においては相互に信心は同一である。だからして心と心とが相通ずるわけである。「共に金剛の志を発す」とは、そういうことである。しかし、自力では心と心とは通じない。「各発無上心」とは、相通じない各発の心である。各発無上心は成就しないものである。「共発金剛志」のみが成就するのである。この成就する相を、善導大師は「横超断四流」と、こう現わされたのでありましょう。これらのことは、『教行信証』にもその意味をお述べなされてある訳であります。

三

「前念命終、後念即生」と申しますのは、「至心信樂欲生」の三信の中に於ていわゆる信樂。至心信樂欲生という至心信樂と結びつけますと、「至心信樂」は「前念命終」である。それから「欲生心」は「後念即生」である。何故かと申しますならば、信樂は至心を体とする、如来の至心即ち南無阿彌陀仏の名号を体とするのであるが故に、真実信心はただ一念という極めて短い時間に円満成就するのであります。至心を体とするが故に信心は一念に成就するのである。つまり「如来より賜わる」ということで一念に成就

する。信の一念ということが成立するのであります。

それならば、信は一念に成就すれば、それでもう信は終るものであろうか、と云えば、そういう訳ではありません。信は至心、即ち南無阿弥陀仏を体とするが故に一念に成就するけれども、また、信は生命のあらん限り憶念相続するものである。信樂が一念に成就するのは、信樂は至心を体とするが故である。だから、その信心はまた願として、信は願という相になって、我らの生活を指導していく。それはどういう訳であるかと云うと、やはり至心を体とする、——信樂も欲生もすべて至心を体とする、——それ故に信心は一念に成就するが、またその信心は一念に終らずして、願として、願という相になって、我らの一生涯を指導する指導原理となるのである。こういうような事は、『教行信証』では「信巻」本巻に述べられてあると思います。そして「信巻」末巻の方は、本願成就の文の御心をお示しになっているわけでありま

す。

真実の信心は一念に成就するし、また一念に成就したところの信心は至心を体とするが故に、それは我らの生活の上には願という相をもってあらわれる。憶念というのは願でありましょう。憶念の念には念願という字句があります。ただ往生が定まったから願はいらないということではない。往生が定まった、そこに我らの人生がある。我らの人生は往生の生活を云うのである。願往生の生活でありましょう。普通には往生が定まったから願はいらんと、こう考えられます。往生が臨終まで定まらんからして願往生ということがあると、こういう風に考えるところの教えもある。臨終まで油断なく如来の一心帰命は続いているかなければならないと、こういう風に考える考え方もあるのであります。けれども信心は如来の本願を体とするのでありますからして、私共は信心を更に深く掘り下げて、そして如来の本願を念じていく、如来の心を念じていく。もう助かったから有難いと、仏恩報謝だと、こう云うけれども、しかし私

共のこの迷いの身体というものはどこかに残っている訳でありましょう。だからして私共は、いわゆる従果向因といいますが、「流れを酌んで本源を尋ぬる」と申しますか、自分は信の一念で助かった、ただ助かったというだけで有難いと、そういう訳ではないのであって、やはり如来のその為の永い間の御苦勞を念じているということがなければならぬ。

「聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」これは信の一念を述べたものでありましょう。それから「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と云うのは、信の一念を戴いて後念相續の心を、「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、信は願より生じたのでありますからして、信はその如来の願心を深く掘り下げていかなければならぬ。これは自然法爾であります。

ところが、信心を得てそして往生しているのに何故に「願生彼国」ということがあるかと、「願生彼国」はもういらんではないか。得生してしもうてから願生はいらんではないかと、こういうことが大きな問題であると考えることが出来ると思うのであります。これはつまり、如来の御恩、如来のやるせない御心を憶い出せば、もう助かってしもうたというところに立って止まっていることは出来ません。この如来は我を救けんと思い立たれた。その思い立たれた根源に遡って、如来が永い間御苦勞下されたその為に、この身を粉にしても骨を砕いても仏恩報謝をしなければならぬ、そういうことを念頭に置いて一刻も忘れないようにして、そして如来の御心を我が心として、如来の願心を我が心としていくということが、仏恩報謝ということでありましょう。いわゆる「流れを酌んで本源を尋ぬる」、その本源を尋ぬるといのが後念相續である。

四

『歎異抄』第十三条に「弥陀の本願不思議におはしませばとて悪をおそれざるは、また本願ばかりとて往生かなふべからずといふこと」とあって、そこに「悪をおそれざるは」とありますけれども、御物語第一条には「悪をおそれるべからず」とある。

「弥陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をおそれるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆへにと云々」

「悪をおそれるべからず」という御言葉は聖人の御言葉であります。第十三条では「悪をおそれざるは」とありますけれども、第一条では「悪をおそれるべからず」とある。これは、聖人の信心とその信心の相続、後念相続である。「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をおそれるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆへにと云云」。この「そのゆへは」と云うのが、信の一念を述べたものでありましょう。「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします」と、こういうように一念の信を戴いたと、そして一念の信を戴いたならば後念相続すると、どういう後念相続であるかというのが、「しかれば本願を信ぜんには」ということでありましょう。それは後念相続を述べたのである。「しかれば本願を信ぜんには」——いわゆる信心の生活にはどのような生活があるかということ、「他の善も要にあらず」「悪をおそれるべからず」、それはどういう訳であるかと云えば、「念仏にまさるべき善なきゆへに」、つまり念仏があるから、専修念仏の生活があるからである。他の善も

要にあらずと、一心一向南無阿弥陀仏である。一心一向南無阿弥陀仏であれば悪をも恐れない。まあ、人間は凡夫でありまするからして色々の間違いもあるし、宿業というものもあるわけであります。だから、どういふことでどういふことがあるかもしれない。しかしどういふことがあるからと云うて、別に恐るゝことはない。専修念仏をもって一貫した生活をしているということが後念相統ということであって、そういうことを「しかれば本願を信ぜんには」と云って、後念相統を教えて下されたのであります。

それで、お話をしたことがあるかも知れませんが、六月東京でお話したのは、――夏目漱石の『三四郎』という小説の中に、偽善者という者と露悪者という者について述べて、その中間者があると云っておられたと思うのでありますけれども、親鸞聖人の御心では我らは凡夫である。凡夫というのは自主的生活の出来ないものであって、環境によって善人ともなり悪人ともなるのである。だから、偽善者と露悪者の中間のものはないのであります。二者択一であります。偽善者であるか、或は露悪者であるか、いづれかであります。もしそうであるならば、偽善者であるといふことは一番情ない。露悪者の方は、他力をたのむという一心帰命、如来に帰命するといふことがあるからして、悪を恐れなくていい訳である。露悪といつても必ずしも恐れなくていいものである。一々露悪を説いておるならば信心は成し遂げられないのであります。だから偽善者に対しては極めて厳しいけれども、露悪者に対しては極めて寛大である。

御承知のように、和讃の中に『愚禿悲嘆述懐和讃』というのがあります。これは聖人の晩年のお作であつて、『正像末和讃』の中に掲められてあります。その『愚禿悲嘆述懐和讃』に

「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし」

と詠われている。虚仮不実というのは真実心もなく清浄心もないということである。清浄心というのは、「愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑す」という中で、愛欲の広海に沈没するのは清浄の心がないのでしよう。それから名聞利養の生活は虚仮不実である。名聞利養ということは、言い換えれば、休みの生活である。休みがあるが故に名聞利養の生活をするのであらう。それはつまり虚仮不実ということでありましよう。

「信巻」本巻に「三心釈」がありますが、その中の最初の至心について、至心は如来の大悲廻向であるということを描べられる始めのところに、「一切の群生海、無始より已来、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無し、虚仮諂偽にして真実の心無し」という詳しい釈があります。それから見ると、「虚仮不実のわが身に」というのは、真実心がないということである。そして清浄心がないのは愛欲の相でありましよう。「愛欲の広海に沈没し」と云うのは、清浄の心がないから愛欲の広海に沈没するのである。また、真実の心がないから虚仮不実であり、虚仮不実のわが身なるが故に、我々は野心を持ってゐる。常に野心を抱懐している。抱懐している野心は名利の為に動く。名利の為に動くのは真実心がないからであり、愛欲の広海に沈没するのは清浄心がないからである。こういう風に解釈することが出来ると思います。

五

「外儀のすがたはひとごとにて 賢善精進現ぜしむ

貪瞋邪偽おほきゆへ 奸詐もゝはし身にみてり

悪性さらにやめがたし こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆへに 虚仮の行とぞなづけたる

無慚無愧のこの身にて まことのこゝろはなければ

弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

このように述べられてありますのは、「外儀は仏教のすがたにて、内心外道を帰敬せり」ということがあるからであります。聖道門の人は皆そうだというわけではありませんまいけれども、多くの人が皆この通りである。これを見ますと、やはり偽善者、偽善ということについて特に喧しく言われている。露悪者、露悪ということについてはあまり仰せにならない。凡夫なるが故に仰せにならない。偽善者というのは、大体信心がないから偽善者になるのである。また信心があつてさえも偽善者になる。誠に悲しむべきことである。だから偽善を深く悲しんでいるのである。

『教異抄』第三条に

「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはいく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この条一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にはあらず。」とあるが、そこに言われている自力作善という善は、真実の善ではなくて偽善である。つまり「自力作善のひとは」という意味は、「偽善者は」という意味でありましょう。偽善者は「ひとへに他力をたのむ」ということではない。「他力をたのむ」と申しますのは、自然法爾の相でありましょう。自力作善は自然法爾ではない。自力作善のひとは偏に他力をたのまない。口には他力、他力と言っておるけれども、本当に他力を信じない。従つて、そういうものは弥陀の本願の正機ではない。弥陀の本願の正機であるというそういう自覚的な信心はない。

「しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。」

「しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば」と、善人の恵みにて自分は自ら悪人であるという自覚がおこってくるのであるが故に、そのひとは「眞実報土の往生をとぐる」のである。「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人……」「他力をたのみたてまつる悪人」というのは、つまり法の深信を包んでいる機の深信でありましょう。法の深信を包んでいる機の深信を顕わして「他力をたのみたてまつる悪人」と、そういう一つの信心でありましょう。そういう機の深信、それは「もとも往生の正因」である。「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき」と。これは、法然上人のお言葉であるということを示すために、「おほせさふらひき」とあるのである。「おほせさふらひき」というのは、親鸞聖人が、これは法然御師匠様の仰せであるということをお示しになったのである。

「おほせさふらひき」というのを段々と読んでいきますと、第十條にも「おほせさふらひき」とある。

「念仏には無義をもて義とす、不可称不可思議のゆへにとおほせさふらひき。」

この「おほせさふらひき」も、やはり、聖人の御物語でありますけれども、親鸞聖人が法然上人の仰せであるということをお示しになったものである。このように、これは法然上人の御言葉であるということをお示し、私は増谷文雄氏から聞いたわけであります。そうすれば、「おほせさふらひき」という意味は、はっ

きり解ります。

親鸞聖人は法然上人からそのように聴聞したのである。けれども、そういうことは世に伝えられていない。ここに、法然上人の御言葉があるということは、世に殆んど伝えられていなかった。法然上人は悪人正機というようなことを仰せられないのであろうし、また「念仏には無義をもて義とす」ということも、法然上人の御言葉としてはない。ただ、「念仏は要なきを要とす」という言葉は浄土宗の方も伝えている。

「義なきを義とす」というのは、親鸞聖人のみが伝えていなさることである。まあ、こういう風になっておったものでありますからして、第十条の御言葉も法然上人の御言葉であるということが不明瞭になっておったのであります。それを増谷文雄氏が調べられて、法然上人の御言葉の中にこういう御言葉があると、こう云っておられる訳であります。だからして、「おほせさふらひき」は何方が仰せられたかということ、法然上人が仰せられましたということを、私の言葉じゃなくて法然上人の御言葉であるということを教えて下さる為に、第三条と第十条に限って「おほせさふらひき」とある訳であります。そういう風に決めても差支えなからうと思うのであります。

尤も、御物語の十ヶ条全部は親鸞聖人の御物語であるに違いありません。法然上人がこう仰せられたと親鸞聖人が物語られたのであるからして、法然上人の御言葉であっても、親鸞聖人がそれを教えて下された訳であります。法然上人はこのような教えをあまり広く教えて下されない。法然上人の教えは広く一般に通じておらなかった。それが親鸞聖人によって始めて一般の人に解るようになったのである。そういう訳でありますからして、この御物語十ヶ条全部が親鸞聖人の御物語であると云って差支えない訳であります。けれども、特にここに「おほせさふらひき」とあるのは、法然上人の教えを親鸞聖人が伝えて、広く一般の人々に教えて下されたということである。つまり、もとは法然上人の教えであるけれども、それ

を親鸞聖人によって普く皆んなに教えて下された。そういうのが親鸞聖人の御恩というものである。こう思うて間違いないと思うのであります。ただ一概に第三条と第十条は法然上人の御言葉であると、そう云っただけでは世の中は通用しない。法然上人の御心が親鸞聖人によって始めて一般に伝えられたと、こういう風に了解すれば良からうと思うのであります。

だから「悪をもおそるべからず」と云う、悪を恐れないということは悪を恐れない本願ほこりだと、本願ほこりだから往生できないわけである。凡夫の悲しさには本願ほこりは止むを得ないことである。偽善は悲しい。自力の計らいがあるから偽善が離れないのでありましょう。偽善はとれないけれども、「他力をたのみたてまつる」という信心さえ定まっておれば——信心が定まっても偽善を悲しんでおいでになる親鸞聖人である。阿弥陀仏の本願は悪人正機である。悪人正機ということを通じて疑われないけれども、やはり偽善の心はなかなか洗い去ることのできないものであるということ深く悲しんで、『悲嘆述懐和讃』を御制作になったものと考えられます。親鸞聖人は偽善ということを深く悲しんでおられる。けれども露悪の方は、あまり深く悲しんでおられない訳であります。まあ、これだけのことを一応我々は了解しておく必要があると思います。

今年の六月の東京での最初の「歎異抄の会」には、そのようなことをお話した訳であります。

今度、十月二十二日に東京へ行きましたときの「歎異抄の会」では、『歎異抄』に真宗再興の精神というものがあるということを申したのであります。どうしてそういう題を与えられたかと申しますと、私は二十八年前に安居の本講をお引き受けして『歎異抄』を講義しました。それは『歎異抄聴記』として今日残っている訳であります。安居に於ける『歎異抄』の講義の開講式の時に、そういう話をしたそうであり

ますが、私は今でははつきりと覚えておりません。けれどもその開講式の時に、題目の歎異の精神ということを話して、歎異の精神は真宗再興の精神であると、そういうことを話したと、だから今回は、その真宗再興の精神とはどういうものであるかを話してくれと、こういうことでありました。それで、その時どういような話をしたかということは、今は憶えておらんのでありますけれども、とにかく歎異の精神は真宗再興の精神であるということを話した訳であります。

蓮如上人は『歎異抄』を取り上げて、その奥書に

「『右斯聖書者、為當流大事聖教也。於無宿善機、無左右不可許之者也。』」

と記されているように、一般の人々にやたらに『歎異抄』を読ませたり、それを振り回したりしないように、『歎異抄』は大事の聖教であるから宿業開発の機にのみ読んで聞かせるのがよからうと、そういうように奥書に書いておられます。

そう言うことがあるので、十月の東京の「歎異抄の会」のとき、真宗再興の精神とはどういうものであるかを明らかに話して欲しいという注文があつて、何かそういうことを話した訳であります。

今日はこのようなことを思い出して、偽善者と露悪者、偽善者には非常に厳しく露悪者には極めて寛大であるということ、——とにかく眞実信心を得れば、偽善者と露悪者というものに対する態度が違うということ、また、我らは生きている間は、偽善者であるか露悪者であるかの二者択一であるということ、——そういうことを『歎異抄』の第十三条を読んで、そこにはそういうことが述べられてあるということをお話した訳でございます。

（本稿は、昭和四十五年十一月十二日、大谷大学大学院における最終講義の筆録である。文責 小野蓮明）